法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

<研究ノート>ヴァッサー・カレッジにおける永井繁子 : 彼女の学んだ一九世紀後半の西洋音楽

生田, 澄江 / IKUTA, Sumie

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
50
(開始ページ / Start Page)
180
(終了ページ / End Page)
198
(発行年 / Year)
1998-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00011271

Hosei University Repository

〈研究ノート〉

ヴァッサー・カレッジにおける永井繁子

――彼女の学んだ一九世紀後半の西洋音楽――

生田澄江

はじめに

永井繁子は岩倉使節団に同行して渡米した初の国費女子留学生の一人である。彼女はアメリカにおいて多感な少女期に、西洋音楽習得の基礎であるピアノという楽器に出会い、一八七八（明治一一）年にニューヨーク州ポキプシーの女子教育の名門ヴァッサー・カレッジ芸術学部音楽科に入学し、一八八一（明治一四）年六月二二日に同科を卒業した。日本人として西洋音楽の分野で大学教育を受けた、最初の人であったといえよう。

彼女は帰国後、文部省音楽取調掛、東京音楽学校、東京女子高等師範学校教授として、七人の子女を育てつつ奉職すること二〇年に及んだ。しかしこれまで永井繁子についてのまとまった研究は極めて少なく、わずかに亀田帛子氏の「瓜生繁子断章――東京音楽学校時代を中心に――」[1]、及び今井一良氏が繁子のアメリカ時代の日記と彼女が死の前年に『ジャパン・アドヴァタイザー』紙に寄稿した「回想記」[2]を紹介した「瓜生（永井）繁子の英文日記と回想記」[3]があるだけである。そこで私は一九九六年八月から九月の初めにかけて、永井繁子の生涯を決定づけたヴァッサー・カレッジを訪問して、関係史料の調査を行った[4]。

一　ヴァッサー・カレッジの音楽教育

一八七七―七八年度の『ヴァッサー・カレッジ便覧』*Vassar College Annual Catalogue 1877-78*によれば、同カレッジの入学志願者はまず予備試験 preliminary examination で英文法、初等数学、近代地理、合衆国史の四科目の学科試験にパスすることが要求される。次に音楽科を志望する学生は「十分なる天性の才能の証拠」を示すことを要求される[5]。これはいうまでもなく本人の音楽的な演奏能力を指しているわけである。繁子の場合、予備試験の成績はアメリカ人の受験生よりずっと優れていた。とくに英文法の成績は良く、これは彼女が在米七年で英語という外国語を駆使する能力を確実にわがものとした証左であろう。そして後者については簡潔に「充分」Satisfactory という評価が与え

Hosei University Repository

られていた。[6] それでは同カレッジの音楽科の教育内容はどのようなものであったであろうか。

繁子が在学した一八七八―七九年度から八〇―八一年度までの『便覧』によると、同カレッジの芸術学部は美術科と音楽科とから成り、その教育内容は次のように記されている。[7]

(イ)「芸術学部の全課程は約三年間を必要とする。しかしある程度熟達した学生は、より短期間で全課程を修了することができる。そのような特別な場合は学長の承認を得て、学部長がその学生のレベルに適した、より短い課程をアレンジすることもできる。しかし学生は担当の責任者によって認定されていない学習計画を行うことは許されない。卒業証書は全課程を完全に修了し、要求されるすべての試験をパスした者に対して授与される。」

ヴァッサーは四年制の女子大学であったが、これによると芸術学部に限っては、修業年限が三年であったことがわかる。[8] ただ修業年限が学生の習熟度によって短縮されうるとなっているところが、いかにもアメリカらしい。

(ロ)「音楽科における教育は音楽理論の知識を基礎とする偉大なヨーロッパの音楽家のクラシック音楽の修業であり、最高の教養としての音楽を目標にしている。原則として能力の疑わしい者は受けつけない。ピアノの分野ではバッハ、ヘンデル、スカルラッティ、ハイドン、クレメンティ、モーツアルト、クラマー、ベートーヴェン、モシュレス、ウェーバー、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、そしてリストの作品が基礎となる。」

この中にはなぜかショパンが含まれていないが、学内コンサートのプログラムにはしばしば登場することを指摘しておきたい。

(ハ)「次にオルガンはバッハ、リンク、ヘッセ、リッター（同校音楽科長）、音楽はガルシア、バッカイ、コンコーネ、バルドーニ、マルケージ、パノフカなどの母音唱法やソルフェージュ。芸術性の高いイタリア、フランスオペラのアリア及びシューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、R・フランツなどの偉大な作曲家の作品による。」

ここに列記された作曲家の作品は一八八四年の同学科の教授が注文した楽譜のリスト[9]にも記載されているが、現在も使われているツェルニー、『ソナチネアルバム』やバッハの『インヴェンション』も注文されはじめていることがわかる。その反対に現在でもよく使われているピアノのテクニック教本としての『ハノン』などは見当たらず、そのかわりにドイツのピアニストで作曲家レシュホルン Löschhorn の *School of Octaves* や *Klav*〔iar〕*Tech*〔niek〕などと記された教本が多く注文されている。

(ニ)「週二回のレッスンには正規コースの勉強と毎日四十分の練習時間が与えられる。このような制限の下では、高度な音楽の達成は難しいとの印象を与えるかもしれない。しかし経験が教えるところはその反対である。合理的なメソッド、集中的努力、そして大学の課程における方法論的影響が結びつき、最も満足すべき結果を生んでいる。」

実技の教育は別として、『便覧』によると、そのほかの課目は音楽理論、和声学、通奏低音・カノン・フーガ作曲形式および奏

Hosei University Repository

法、音楽史、音楽美学、音響学、作曲などで、[10]現代の音楽教育の場合と基本的には異ならない。この中で特に「和声学」を修めない者は卒業できないと規定されている。繁子が三年次で「和声学」を修めていることは、同校の学務部 Registrar の記録で確認した。

(ホ)「学生に開放されるコンサートは一年に八回から九回行われる。その際海外からの（演奏家が）しばしば参加する。」

(ヘ)「図書館には音楽科の学生のために五〇〇〇から六〇〇〇曲の楽譜が準備され、無料で貸し出される。またピアノの使用料は週二度で年間一〇〇ドルである。」

(ト)『便覧』に掲載された職員録によると、音楽科の教師はリッター教授以下八名で、ピアノ担当が六名、声楽担当が一名、オルガン担当が一名であり、ピアノの教師のほうが圧倒的に多い。合唱の指導はリッター教授が行った。ただし実技以外の諸々の課目、たとえば「和声学」などの担当教師の氏名は記載されていない。そこで前記の教材の注文書を見ると、四人の教師、すなわちリッター教授、ホイットニー Whiteny、フィンチ Finch、チャピン Chapin がヒラー Hiller 著『和声学』*Harmony* 一冊と『和声学入門』*Harmony Primer* 三冊を注文していることがわかる。当時はおそらく現在のように実技と理論を別の教師が教えることはせず、リッター教授と二人のピアノ教師、一人のオルガン教師がピアノおよびオルガンを教えつつ音楽理論の課目を適宜教えていたものと思われる。

前記の学務部の記録によると、繁子は音楽関係の課目の他に一般教養課目として英作文 English composition、フランス語およびフランス文学、数学を履修しており、とくにフランス語は三年間にわたって履修していることがわかる。

さて当時は同校の教授たちとその家族はみな大学内の宿舎に住んでいた。同校の校内誌『ヴァッサー雑誌』*The Vassar Miscellany* には、学生が教授の部屋を訪ねて家族的な交流を持っている様子がしばしば記事として取り上げられており、音楽科長のリッターも音楽家で著述家の妻フランセス・レイモンド・リッター Frances Raymond Ritter と共に学生を歓待している。学生は繁子をはじめ全員が寄宿生活を送っていたので、彼女たちにとっては楽しいひとときであったにちがいない。[11]声楽クラスのレディたちはリッター教授からイタリア語のレッスンを受けている。[12]

またリッター教授は同校内に事務所を設け、彼自身の音楽活動の拠点としていた。では音楽科創設のパイオニア的存在である、同校を代表するリッター教授とはどのような人物であろうか。

二　ヴァッサーの音楽科長リッター教授

フレデリック・ルイス・リッター Frederic Luis Ritter（一八三四―九一）は当時フランスの一部であったアルザスのストラスブルクに生まれたスペイン系ドイツ人である。彼は早くから音楽的才能を示し、ハンス・シュレッテルン Hans Schlettern、フラニー・ハウザー Frany Hauser、そして彼の従弟J・G・カストナー J. G. Kastner にプロテスタント神学校の教授フェ

Hosei University Repository

ネストランジュ Fénéstrange とともに音楽を学んだ。彼は一八世紀から一九世紀にかけてアメリカという新天地に移住してきた多くのヨーロッパ生まれの音楽家の一人である。彼は一八五六年に両親と共にシンシナティーに落ち着き、当地にセシリア合唱団 Cecilia Choral Society やフィルハーモニック・オーケストラ Philharmonic Orchestra を創設した。彼が移住してきた頃の同市はドイツ人の男性合唱団と聖歌隊が自慢であったが、当時最もうけていたのはミンストレル・ショーであった。それは一八二〇年頃から始まった、白人が顔を黒く塗って、縞のズボンにぶかぶかのカラーという黒人の扮装で歌やダンス、寸劇、政治風刺などを演じるものであった。女子留学生の一人津田梅子は「ある晩連れていかれて、この世の生物とは思えない男たちを見て震え上がった」と回想している。[13] 女子留学生たちは帰国して四十五年もたったある日集まり、話題はこのショーで見た黒人に驚愕したことを語り合ったと『東京朝日新聞』が報じているから、[14] 余程印象深かったとみえる。

リッター教授は、このように芸術的なものと単なる娯楽とをまだ区別できなかった一般のアメリカ人にヨーロッパ仕込みのクラシック音楽を紹介して、音楽的評価をわがものとした。彼は一八六一年にニューヨークに移り、南北戦争が終わると当地で積極的に活動し、この時期におけるアメリカでの音楽的興味の高まりに、それなりの役割を果たした。彼はセイクリッド・ハーモニック協会 Sacred Harmonic Society、アルビオン男性合唱団 Albion Male Chorus Society の指揮者として活躍し、また毎年のように七つの系列のコンサートの音楽監督をした。

彼は一八六七年にヴァッサーの音楽科長に迎えられた。教授になってからの彼は音楽関係の著述に専念し、J・ライランド・ケンドリック師 Rev. J. Ryland Kendrick とともに『賛美歌集』*Laudamus* を編纂して、一八七七年に刊行した。彼はまた英・独・仏語で各種の音楽雑誌に音楽評論をしばしば寄稿した。もっとも彼は変名で自分自身の作品をピーアールしたり、自分の作品をとりあげて演奏してくれない音楽家に対しては、辛辣な批評を下したということである。[15] しかし彼の『音楽の歴史』（一八七〇―七四）所収の「アメリカ音楽」（一八八三）は、当時の出版物の中では最も興味深い著書のひとつで、特にそれまであまり注目されることの少なかったアメリカ音楽についての関心を喚起したという点では、評価されるだろう。[16] 現在では彼の作品はほとんど演奏されていないそうだが、三つのシンフォニー、交響詩「ステラ」Stella、「序曲オセロ」Othello や、「ピアノとチェロのための協奏曲」などいくつかの室内楽は、当時ニューヨーク、ブルックリン、ボストンで演奏されていた。彼はまた「オルガン幻想曲」、「賛美歌」四、二三、四六、九五番、それに百曲以上の歌曲を作曲しており、ヴァッサーの音楽科においても自分自身の作品をしばしば教材としている。[17]

彼は著述、作曲などの業績によって一八七八年にニューヨーク大学で博士号を取得した。この年はちょうど繁子がヴァッサーに入学した年で、四〇代の油の乗り切った教育者としてのリッターが繁子をどう見ていたかは興味深い点であるが、残念ながらリッ

Hosei University Repository

ターの日記にも彼女の手記にも言及はない。

三　繁子がヴァッサー在学中に鑑賞したクラシック音楽

繁子は在学中どのような音楽を聴いたのだろうか。私は三年間に催されたコンサート・プログラムを検討したが、繁子は少なくともヴァッサーで行われた二〇回以上のコンサートを聴いていることになり、その間、自分自身も六回コンサートに出演している。

当時のプログラムを一覧すると、当時のコンサートは①いわば音楽学生の進級・卒業コンサート、②教授と学生の合同コンサート、あるいは教師だけのコンサート、③外部の室内楽団、声楽・ピアノのソリストを迎えてのコンサート、の三種類にわかれている。コンサートは年間に八、九回開催され、そのほとんどをリッター教授が音楽監督をつとめ、必要に応じて司会などもつとめている。それでは先に、②の教師だけのコンサートと③のコンサートの一部を紹介しよう。

1　音楽科教師の演奏曲目

一八七九（明治一二）年三月二一日金曜日の「音楽の夕べ」は繁子のピアノの教師であるミス・ハッバード Hubbard とミス・ブリス Bliss の独奏と二重奏のコンサートであった。前者は繁子が卒業した後、ベルリンに音楽修業に旅立った。そのプログラムは次の通りである。

一　ベートーヴェン「ソナタ変ホ長調作品二七」[18]
二　ショパン「夜想曲ロ長調作品三二」
三　モーツアルト作曲クルク Kulluk 編曲「クローエに寄す」An Chloe
以上ミス・ハッバード Miss Hubbard
四　ショパン「ロンド」作品一
五　バッハ作曲サンサーンス編曲「ヴァイオリン・ソナタ第五番」より「ラルゴ」
同　「レシタティーヴとアリア」
六　ベートーヴェン作曲リスト編曲「アデライーデ」Adelaide
以上ミス・ブリス Miss Bliss
七　モシェレス Mocheles「ヘンデルをたたえる二重奏曲作品九二」Duo. Hommage à Händel
ミス・ブリスとミス・ハッバード

ここで特徴的なのは、ヴァイオリン曲や歌曲をピアノ曲に編曲したものが三曲（三、五、六）もとりあげられていることである。この点については本論の最後で触れることとしたい。

2　外部から招かれたピアニストによるリサイタル

一八七九（明治一二）年二月七日、チャペルにおいてドイツ人音楽家フランツ・ルンメル Franz Rummel を招いてピアノ・リサイタルが催された。彼は多分移民ではないかと思われる。プログラムは一〇曲から成り、バッハからリストまで、バロック、古典、ロマン派と音楽史の流れに沿った構成となっている。そし

Hosei University Repository

てその中に一曲だけソナタが入っている。そのプログラムは次の通りである。

一　バッハ「半音階風幻想曲」
　ヘンデル「組曲ホ長調」
二　ベートーヴェン「ソナタ　ヘ短調作品五七」〔熱情〕
　シューマン「謝肉祭の道化作品二六」
三　メンデルスゾーン「厳格な変奏曲二短調作品五四」
　ショパン「夜想曲変二長調作品二七の二」
　同　「即興曲変イ長調作品二九」
　同　「ポロネーズ作品五三」
四　リスト「愛の夢作品三」
　同　「ヴェネツィアとナポリ」より「ゴンドラの女」
　と「タランテラ」

3　管弦楽団などのコンサート

一八八〇（明治一三）年二月二一日、ヴァッサーの同年度第三回「音楽の夕べ」にボストンからメンデルスゾーン弦楽五重奏団が来演した。この楽団は一八四九年にボストンに創立され、五〇年近く活躍した。[19] 奥田恵二氏は同楽団について「二人のヴィオラ奏者はそれぞれフルートとクラリネットに楽器を持ち替えたという記録があるところをみると、（アメリカでは）一般的に行われていたことかも知れない。それは彼らの技巧が本当に専門家のそれではなかったことの証拠とも考えられよう。（中略）二つの全く違った楽器を聴衆の前で奏すること自体になにか寄席芸人的なものの名残が感じられる」と述べている。[20] しかし私はここで、よくいわれる一九世紀のアメリカ音楽の後進性を指摘しようとしているのではない。なにしろ当時の日本で西洋音楽を体験していたのは、陸海軍軍楽隊か、宮内省雅楽部の伶人か、民間ではキリスト教会の信者が唱う賛美歌位であった。学校教育の現場でも音楽は「当分これを欠く」というのが現状であったことを考えると、繁子の体験がいかに貴重であったかということを指摘したいのである。

では当日の五重奏団のプログラムを紹介しよう。[21]

一　ハイドン「四重奏変ホ長調」
二　ドップラー「愛の歌――フルートのための小品」
　シェードSchade氏
三　モーツアルト「クラリネット五重奏曲ハ長調作品一〇八」から「ラルゲット」
四　ハイメンダール Heimendahl「カンツォネッタ」、「バガテル、ワルツ風に」
五　ヴュータン Vieuxtemps「チェロ協奏曲」より「アンダンテ」　ゲーズ Geise氏
六　ベートーヴェン「五重奏曲ハ長調作品一九」

このプログラムを見ると、前述の奥田氏の記述がヴァッサーの音楽会でみごとに証明される。では次に彼らの楽器の受け持ちを記す。

Hosei University Repository

Edward Heimendahl　Violin
Carl Meisel　Violin
＊Thomas Ryan　Clarinette and Viola
＊William Schade　Flute and Viola
Frederick Geise　Violoncello

＊印の奏者はクラリネットとヴィオラ、及びフルートとヴィオラを掛け持ちしている。フルートとヴィオラを掛け持ちしているシェードはプログラム二番で、当時「ハンガリー田園幻想曲」を発表して爆発的人気を博していたドップラーの「愛の歌――フルートのための小品」をソロで演奏しているので、この人は元来はフルーティストなのだろう。

しかし要は、たとえ掛け持ち演奏であろうとなかろうと、当時「室内楽」という、高度な音楽性を要求されるジャンルで、かれらのプログラムのようなハイドン、モーツアルト、ベートーヴェンという巨匠の音楽を繁子以外に聴いた日本人はいないであろうということである。

以上はヴァッサー・カレッジの主催によるコンサートだが、私の手元にボストン音楽堂 Boston Music Hall で一八八一年二月一七日午後三時開演の、一八三七年に結成されたハーヴァード音楽協会 Havvard Musical Association 主催の第七回シンフォニー・コンサートSeventh Symphony Concert のプログラムがある。それは音楽科長のリッター教授の作曲した「交響曲第二番ホ短調」がドイツから来た指揮者カール・ツェラーン Carl Zerrahan によってボストンで初めて演奏されたコンサートであった。この年はちょうど繁子の卒業の年であるが、このような場合、学校や音楽科ぐるみで師のコンサートに馳せ参じるのは今でもよくあることなので、繁子も学友と共にボストンまで出かけて、オーケストラ編成の交響楽を聴いた可能性は非常に高いといえよう。むしろヴァッサーの音楽科の教師の一人か、学生の一人がステージのリッター教授に花束を捧げる役にならない方がこの場合おかしい位であろう。

四　ヴァッサー音楽科の学内コンサートと永井繁子

リッター教授は音楽科長として、実に精力的に音楽会を主催し、外部からの音楽家を招聘し、その音楽監督をつとめた。とにかく彼の日常は多忙の一語に尽きるようだ。『ヴァッサー雑誌』は毎月の各学部の動静を詳しく伝えているが、特に音楽科がシーズンごとに定期的に行う学内コンサートについては、学生一人一人の演奏に対する講評が掲載されていて、リッターを中心にした活気に満ちた雰囲気が伝わってくる。それでは学内コンサートにおける繁子の演奏とその健闘ぶりを垣間見て見よう。

(イ)Eighth Soirée Musicale. 14 June 1879, at 8pm.

『ヴァッサー雑誌』第八巻九号には次のような記事がある。[22]

リッター教授が『音楽の夕べ』としたコンサートの趣旨や目的を簡単に話した後で、ミス・トンプソン Miss Thompson がメンデルスゾーンの「無言歌」の内の一曲を演奏した。それは輝かしい将来が約束されるような明快で正確なタッチの

Hosei University Repository

演奏であった。またミス・エイロート Miss Ayrault は私たちが昔から良く知っている曲の一つであるキュッケン Kucken の「燕の別れ」Swallow's Farewell を歌った。彼女は最初の出演だったので、多少あがっているように見えたが、彼女の澄んだ高音部を讃えたい。

このようにしてコンサートが始まり、次にミス・ファン・ベンスホーテン Miss Van Benschoten が登場した。彼女は繁子より一年先輩のようだ。講評は「将来の成功を約束させるような、チャーミングな歌い振り」という最高の賛辞であった。さて四番手が繁子のピアノであった。彼女の演奏曲目はシューベルト作曲の「即興曲四番作品九〇」Impromptu, op. 90, No. 4 であった。その講評は次の通りである。[23]

ミス・ナガイは、非常な繊細さと表現力を以てシューベルトの「即興曲四番」を演奏した。彼女は演奏の中で音楽的に正しい理解を示した。我々はまた彼女の演奏が聴けることを願っている。

このように、どの学生に対しても好意的な批評に終始するのかと思われたが、「ミス・ニコルズ Miss Nichols は、以前聴いた時のようには良い唱いぶりではなかったことに気付き、我々は失望した」というような講評もある。

なお、当夜の繁子はピアノと歌唱の両方で出演している。しかし歌唱のほうの講評は「メンデルスゾーン作曲の「すずらんと花たち」The Maybells and the Flowers を歌ったミス・ナガイとミス・ファン・ベンスホーテンの二重唱は、ハーモニーしていないように感じられた」という風で、[24] 先にソロを歌って大好評の上級生ファン・ベンスホーテンとの組み合わせだったのだが、どうもうまくいかなかったようである。それだけに彼女の初のピアノ演奏は、他の学生に比して大成功だったといえよう。

この時のプログラムは一五番まであり、その一二番目にコーラス・クラスの学生らがシューマン作曲の「楽園とペリ」Paradise and the Peri のなかの「われらは道をかざる」Deck we the Pathway を合唱し、「その合唱は、良くハーモニーしている。それはリッター教授のたゆまぬ指導と忍耐の証明である。我々は合唱の楽しみを与えてくれたリッター教授に心から感謝したい」という講評を得ている。

『ヴァッサー雑誌』のコンサート欄を読むと、このような記事がよく出てくる。これらの記事からリッター教授はいくつもの合唱団の指揮者をしていたが、学内での合唱指導にも大変熱心であったことがうかがえる。ちなみに一八八二年、繁子が帰国した翌年に、はじめてハイドンのオラトリオ「天地創造」をコリングウッド・オペラハウスで指揮したのもリッター教授であった。

Ⅲ Fifth Soirée Musicale. Saturday, 24 April 1880, at 8pm.

繁子が二年生になってから出場した一八八〇年度第5回「音楽の夕べ」はキャンパス内のチャペルがその会場となった。[25]『ヴァッサー雑誌』第九巻八号の記事は次のように述べている。

このコンサート・プログラム全体が身内の［ヴァッサーの］演奏者だという点がことに興味深かったが、もう一つの楽しい点は、それが幾人かの新入生のデビュー［の機会だという

Hosei University Repository

こと」であった。プログラムの選曲はよくできており、また（演奏者は）それらの曲をよく理解して演奏していた。ただ一つ難をいえば、それは時間が長過ぎたということだ。その結果、プログラムの終わり頃に演奏の順番が回ってくる若い淑女たちにとっては、強い精神的ストレスを受け続けることになり、不公平のように思われた。聴衆も大分疲れた様子だった。

新入生の順番は一六番中一〇番以降であった。二人の新人は一人がショパンの「即興曲変イ長調作品二九」を、もう一人がモシュコウスキー Moshkowski の「楽興の時作品七の二」を演奏したことは、昨年よりも水準が向上していることを感じさせた。

さて繁子は六番目に、メンデルスゾーンの「無言歌第二一番」Leader Ohne worte No. 21を演奏している。この曲は Presto Ajitarto という発想標語の付いている技巧的な速い曲で、近年日本ではそのまま「プレスト・アジタート」あるいは「胸さわぎ」などの表題を付けている。彼女の演奏に対する講評は

ミス・ナガイは、メンデルスゾーンの「無言歌」を力強く、そして大変生き生きと演奏した。[26]

というものであった。繁子の気迫のようなものがこちらにも伝わってくるような講評である。このコンサートはほとんどがピアノ演奏で占められた、長時間に及ぶ大演奏会であった。曲目は先の新人の弾いた曲のほか、ショパンが四曲、メンデルスゾーンが四曲、シューベルト、バッハが各一曲、その他はルービンシュタイン、ボッケリーニ、ヘラーなどの作品であった。

27 Sixth Soirée Musicale (BALLADS). Friday, 28 May 1880, at 8pm

前述のコンサートから一月ほど経った五月二八日に声楽と合唱からなる「バラード」というタイトルが付いたコンサートが催された。[27] この日繁子は七番目の出番であった。彼女はタウベルト Taubert の「子守歌」Cradle Song を独唱した。講評は「ミス・ナガイはタウベルトの「子守歌」を聴衆に非常に分かりやすく歌い、拍手喝采だった」とあるが、[28] これは彼女がピアノ・クラスであったことを知っていての暖かい拍手だったのであろう。タウベルトの「子守歌」は旋律の優美な、平易な歌いやすい曲である。一八七五年五月の彼女の日記から、彼女がヴァッサーに入学する前の、アボット・スクールですでにピアノと共に歌唱の方もレッスンを受けていたらしいことがわかる。では学友たちはどうであろうか。前年のコンサートでは「失望した」とその歌いぶりを評されたミス・ニコルズはこのコンサートではキュッケンの「星」The Star を歌った。彼女の独唱は「ミス・ニコルズの声はチャペルのすみずみまでよくとどき、しかもよく抑制がきいていた」と評され、また繁子の二重唱の相手だったミス・ファン・ベンスホーテンの独唱に対しては「彼女にとって最高の余裕ある完璧さでハース Haas の「緑の牧草地を通って」Through Meadow's Green を歌った」という講評が与えられた。学生はみな前年に比して確実にその演奏技術が向上していることがわかる。

さて、このコンサートのオープニングは、ブラームスの親しみやすい民謡風の合唱曲「アヴェ・マリア」であった。ちなみに

Hosei University Repository

ヴァッサーの教師たちの楽譜注文書には、この合唱曲以外にはブラームスの作品はまだ見当たらない。そしてコンサートは「我らのディレクター（リッター音楽科長）の作品「賛美歌」第九五番 The 95th Psalm の合唱で終了した。彼に対しては、『たとえ最後という有利さがあったにしても、我々のディレクターの作品に真に魅了された』という賛辞が寄せられた。」

㈡First Summer Festival. 21 June 1880, at 5pm.

一八八〇（明治一三）年六月二一日「第一回サマー・フェスティヴァル」First Summer Festival が催された。これは学年末の解放感にあふれたコンサートとダンスの会で、プログラムはリッター教授の企画により、音楽科学生による声楽、バイオリン、ピアノ、ギターのソロとアンサンブルという内容である。コンサートは午後五時半から七時、ダンスは七時半から九時となっている。

このコンサートプログラムは「メニュー」となっており、曲名の紹介を料理になぞらえて、たとえば「ヘンデル風ロースト・ビーフ」Roast Beef à la Händel とか、少し長いのでは「ハイドン」の「四季」から選ばれた朝露したたる野菜、サラダ、ピクルスなどなど」Vegetables, Salads, Pickles, etc. Selected with the Morning Dew upon Them, from Haydn's "Seasons"「ショパン風色付きクリーム」Chromatic Cream à la Chopin（Chromatic には「半音階」という意味もある）など機智に富んだもので、思わず笑いを誘われる。

次にダンスの種類が踊る順に記されている。すなわち「マーチ」、「ポロネーズ」、「ワルツ」、「カドリール」、「ポルカ」、「ワルツ」、「ランサーズ」、「スコッチ・リール」、「カドリール」、「ギャロップ」である。これらが終わると卒業生は学校との別れであり、在校生は長い夏休みに入るのである。プログラムの最後には「さらば」VALE！と記されていた。

繁子は後年このようなヴァッサーでの日々を「ヴァッサーで私はパーペクトな自由を謳歌した」と回想している。[29] さもあろうと思われる。

㈢Third Soirée Musicale. Friday, 25 March 1881, at 8pm.

一八八〇（明治一三）年繁子は三年生になり、そして三か月後に卒業を控えた翌一八八一年三月二十五日、卒業予定の繁子、パーム、ニコルズ、ファン・ベンスホーテン、ショーたちが中心のコンサートが一八八〇年度第三回「音楽の夕べ」として催された。ではその時の繁子の演奏についての記事を拾ってみよう。

この日プログラム第三番目の彼女はマッカ Mr. Matzka という男性と組んでモーツァルトの「ピアノとチェロのためのソナタ、変ロ長調」Sonata, B Flat, for Piano and Violoncello, Andantino Sostenuto. Allegro の二重奏を演奏した。『ヴァッサー雑誌』第一〇巻七号には今までで一番長い講評が記されている。[30]

Remebering the spirit and enthusiasm with which Miss Nagai played last year, we expected to find the good qualities in her rendering of the Sonata by Mozart with Mr. Matzka, and we were not disappointed ;

Hosei University Repository

we thought, however, that the tempo was increased rather too much in some places, and that more legato playing in the first movement would have been an improvement.

繁子の演奏に対する講評は最終学年らしく、音色、テンポ感、レガート奏法にふれた専門的な内容になっている。音色の点では期待どうりだったが、そのテンポはある箇所では速すぎたこと、そして第一楽章のレガートな奏法は、もう少し進歩があれば良かったであろう、とのコメントであった。なお評者は前年彼女がメンデルスゾーンを演奏した時の強い精神力と音楽へのひたむきさを十分に記憶し、評価しているようである。

これまで共に学んできたミス・パームは、ピアノ・ヴァイオリン・チェロのトリオを組んで演奏した。彼女のピアノに対しては明快、力強い調子、美しい表現力、優雅な終章であったとの申し分ない講評が与えられた。ミス・ニコルズはヴァッカイ Vaccaj のアリア「ああ、お前は眠っている」Ah! se tu dormi を、ファン・ベンスホーテンはリッチ Ricci の二重唱「愛の悩み」L'Ansia d'Amore を歌い、いずれも好評であった。ファン・ベソスホーテンは繁子が一年の時の二重唱の相手であったことは前に述べた。彼女は声楽クラスで、卒業式では音楽科から選ばれて独唱をした。

このコンサートの最終六番はベートーヴェンの「ピアノ・ヴァイオリン・チェロ三重奏二長調、作品七〇」Allegro vivace e con brio. Largo assai ed espressivo. Presto であった。ピアノはミス・ショーで、彼女も卒業式のときのピアノの独奏者に選ばれている。このコンサートはアンサンブル奏法の総仕上げというべきものであった。

〈Fourth Soirée Musicale. Friday, 27 May 1881, at 8pm.

これは繁子の卒業の一か月前のコンサートであった。このプログラムには卒業予定者には＊印がつけられ、「音楽科卒業クラス」Of the Graduating Class of the School of Music の卒業課題という注記がついていた。つまり作曲者名の欄に S. Nagai と記され、演奏者は在校生の一人であり、曲名は「空へ向けて矢を放つ」I Shot an Arrow into the Air となっている。ほかの卒業予定者のパーム、フォスター、ショーも同様であった。声楽クラスの生徒が演奏者となっているので、おそらくこれは繁子らが卒業課題として作曲した歌曲の発表作品の伴奏をしたと考えられるが、残念なことにヴァッサー・カレッジ図書館所蔵の『ヴァッサー雑誌』一八八一年六月号が欠けていてわからず、音楽図書館の館長に学生の作品などが残っていないかと聞いてみたが、一九一八年以前のものは保存されていないということであった。その他はピアノではリストの編曲によるワーグナーとシューベルト、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ウェーバー、ショパン、フンメルの作品、声楽ではメンデルスゾーン、キュッケン、グムベルト Gumbert、ステルヒ Sterch、シューマンの名が見える。このように繁子は最終学年における音楽科の卒業課題を、三月、五月、六月と立て続けにこなしていく。そしていよいよ最後の舞台が間近となった。

Hosei University Repository

五　繁子のヴァッサー・カレッジ音楽科最後のコンサート

一八八一（明治一四）年六月二〇日、午後八時からシーズン最後の音楽科のコンサート第五回「音楽の夕べ」が始まった。繁子にとっては、今夕が留学生時代最後のコンサートであり、また周囲もそのような目で見ているという、緊張の舞台であったことであろう。念のためこの日のプログラム全体を紹介することにしよう。[31]

一　ショパン「ロンド作品一」　ミス・リトルフィールド
二　メンデルスゾーン「歌の翼に」　ミス・カーティス
三　ショパン「華麗なるワルツ変イ長調　作品三四」　ミス・ナガイ
四　ベッリーニ、オペラ「清教徒」I Puritani より「わたしは美しい女」Son Vergin Vezzoso　ミス・ニコルズ
五　メンデルスゾーン「協奏曲ト短調作品二五」第一楽章
　第一ピアノ　ミス・アンドリュース
同　第二、三楽章　第一ピアノ　ミス・パーム
六　レーヘル「小さな山の子供」　ミス・ローリンソン
七　ドゥ・ベリオ「ヴァイオリン協奏曲第七番」
　ミス・ウェブスター
八　ドニゼッティ　オペラ「ルクレツィア・ボルジア」より「彼の行動は見張られている　Anch'io provai le tenere smanie　ミス・ファン・ベンスホーテン
九　メンデルスゾーン「協奏曲二短調作品四〇」第二、三楽章　ミス・フォスター
一〇　マイヤベーア　オペラ「悪魔ロベール」Robert le Diable　ミス・ワルラス
一一　ベートヴェン「協奏曲ハ短調作品三七」第一楽章
　第一ピアノ　ミス・フリーデンバーグ
　第二ピアノ　ミス・ブリス＊
一二　ドニゼッティ「ルクレツィア・ボルジア」より「ロマンツァ・〔あの魔法の〕なんと美しいことよ」Romanza, "Com'e bella"　ミス・ハッベル
一三　ヒラー Hiller「協奏曲嬰ハ短調作品六九」　ミス・ショー
　第二ピアノ　ミス・ハッパード＊
　（＊は教師）

繁子はプログラム三番目に登場し、ショパンの「華麗なるワルツ変イ長調、作品三四―一）を演奏している。同期生のリトルフィールド、ニコルズ、フォスター、パーム、アンドリュースらの顔も揃い、繁子らには頼りなったであろう上級生ファン・ベンスホーテン、ショーの二人も一緒である。二人は学位取得のため四年目である。[32] 曲目はショパンが二曲とメンデルスゾーン、ベートーヴェン、当時の名ピアニスト・ヒラーの協奏曲、声楽はドニゼッティ、ベッリーニ、マイアベーアという一九世紀花形オペラ作家のアリアが揃った。なお『ヴァッサー雑誌』にはこの日のコ

Hosei University Repository

ンサートの講評は三日後の卒業式の演奏者に決まっているファン・ベンスホーテンとショーの演奏についてだけしか載っていないのは残念である。こうして繁子は無事に全部の課題を終えた。三年間を通じて記録のある限りでは、これまで紹介してきた演奏会を通じてピアノ独奏三回、二重奏一回、独唱一回、二重唱一回、声楽のピアノ伴奏（？）一回を人前で演奏したことになる。その三日後が卒業式であった。卒業式のプログラムには音楽科卒業生名を次のように列記している。[33]

Graduates from the School of Music

Idelette Elizabeth Andrews, A. B.……Ottawa, Canada
Mary Ellen Foster……Poughkeepsie
Fannie Alvira Littlefield, A. B. ……Middletown
Shige Nagai……Tokio, Japan
Gertrude Nichols……Tarrytown
Julia Anna Palm ……Austin, Texas

（イタリックは生田）

六　ヴァッサー・カレッジ音楽科の音楽的傾向

さて当時のプログラムに目を通していると、これはピアノの独奏か、それとも声楽曲として歌われたのか、非常に紛らわしい場合がしばしばある。たとえば私たちのよく知っているメンデルスゾーンの「歌の翼に」はもとは声楽曲だが、歌唱の場合とピアノの演奏の場合とがあるのに気づく。一八八〇年度第五回「音楽の夕べ」ではメンデルスゾーン作曲ヘラー編曲 Mendelsson–Heller となっており、この場合は明らかにヘラー編曲のピアノ曲「歌の翼に」である。演奏者のミス・パームは一番年齢が若く、一六歳で、繁子と同期に入学し、同期で卒業した。彼女は講評で「彼女は若い演奏者の中で、ピアノにおいて際立った才能の持ち主である」と期待された学生である。それゆえ、この選曲には私は少々不満なのだが。

ここで一九世紀という時代の音楽的風潮を簡単に述べるならば、当時は現在のようには交通手段も発達せず、オペラ団や演奏家なども限られた大都市しか巡演せず、ましてやレコードもない当時、音楽を聴きたければ、自分で弾くしか方法がなかった。アメリカにおいては南北戦争が終わり、人々の気持ちにもゆとりが出てきたため、音楽に対する関心が急激に高まり、ピアノを習う子女が増え、今でいうホーム・コンサートが流行した。つまりこれがピアノの大衆化の始まりであった。ピアノという楽器を囲み、家族が団欒したり、訪問客があれば弾いてもてなすのである。それゆえ、ピアノ曲以外の管弦楽曲、オペラのアリア、歌曲や民謡に至るまで、軽く美しい旋律の音楽が続々とピアノ曲に編曲され、その需要にこたえてたくさんの楽譜が出版された。[34]

そのため、一八二〇年頃まではピアノ音楽の主流を占めていたピアノ・ソナタは次第に人気を失い、耳に快く、柔らかく響くロマンティックな「即興曲」、「夜想曲」、「幻想曲」や、また有名な歌曲や民謡をもとにした「変奏曲」、軽快なロンドやワルツが好まれるようになった。そうした傾向はヴァッサーの音楽科のコンサートのプログラムにも顕著に見られる。繁子の三年間の在学期

Hosei University Repository

間（一八八八―九一）についてみても、最初は大学教育といっても、その内容は家庭音楽の延長にあるといってよい。当時のアメリカはまだ独自の芸術作品を持たず、音楽教育もヨーロッパのような英才教育というよりは、市民の家庭の中で楽しむ音楽の延長として出発しているところが、いかにもアメリカらしい。前述のミス・パームのための選曲もその現れであるし、繁子のレパートリーの場合も同様である。しかし最終学年になると、学生の演奏技術の向上にともなって、ベートーヴェン、モーツァルト、メンデルスゾーンなどのソナタや重奏曲、協奏曲がレパートリーに取り入れられている。

次に歌唱、ピアノ演奏を通じて最も多く選ばれているのはメンデルスゾーンの作品である。彼の難解なところのない、上品で優美な旋律が当時の人々に歓迎されたのであろう。とくにピアノ曲集『無言歌』はコンサートのたびごとに必ずレパートリーとなっている。『無言歌』は現在でも結構人気を保っているピアノ曲集である。

二番目に多いのはシューベルトとショパンであるが、シューベルトはほとんど「即興曲」で、ショパンはむつかしいエチュードおよびバラード、プレリュード類は見当たらず、ロンド、ワルツ、夜想曲、ポロネーズが再三取り上げられている。そしてその中に一、二曲のソナタと協奏曲が加えられるというのが、平均的なプログラムの構成であるが、この場合はさすがにベートーヴェンの作品が圧倒的に多い。クレメンティも人気がある。その他、現在ではもうすっかり忘れられているが、一九世紀に活躍した、主としてピアニスト出身の作曲家の作品が目につく。たとえば繁子の最後のコンサートの際にミス・ショーが最終を飾ったヒラーの「ピアノ協奏曲嬰ヘ短調作品六九」は、演奏時間が一八分もかかる、ショパン風の華麗で技巧的なピアノ曲で、一八五六年にヒラー自身によって初演されたということである。この曲は当時は大変人気があるレパートリーであったことがこのプログラムの構成からも察せられる。その他ヘンゼルトの協奏曲なども取り上げられている。[35]

一方声楽のほうは、メンデルスゾーン、ベッリーニ、ドニゼッティ、キュッケン、バッカイ、リッチ、アプト・ラフなどの作品がとりあげられているが、現在の声楽の初学者が必ず学ぶといってもよい『イタリア古典歌曲集』*Alie Antiche Italina* 所収の歌曲はほとんど歌われておらず、ヘンデルの「私を泣かせてください」Lascia chio pianga および「樹木の蔭で」Ombra mai-fu（Largo）が目につく程度である。同書に収められた歌曲は古典的な素朴な様式美を持つもので、甘く、感傷的な華やかさを求める一九世紀の好みには合わなかったのであろうか。いずれにしても繁子は三年間に二〇回以上のコンサートで、主に一九世紀ロマン派の音楽を体験したわけである。

繁子が学んだ当時のヴァッサー・カレッジの音楽環境は以上のようなものであるが、寺小屋で読み書きをいくらか習っただけで、ピアノを学ぶために留学したわけではない彼女が、明治期の日本人の血がなかなかなじめなかった西洋の音楽に挑戦し、アメリカ人学生の中にただ一人の東洋人として卒業を果たしたことを

Hosei University Repository

高く評価したい。

七　帰国後の永井繁子――そのもたらしたもの――

西洋音楽は日本人にはあまりに異質な文化だったゆえ、その導入は、一八七二（明治五）年八月「学制」が発布され、辛うじて「唱歌」が学校教育の中の正課に加えられはしたものの、「当分これを欠く」という状態で、教えられる人材がいなかった。

一八七五（明治八）年七月、愛知県師範学校長の伊沢修二は師範教育取調べを命じられ、アメリカのブリッジ・ウォーター州立師範学校に入学した。彼はほとんど全科目優秀な成績であったが、音楽だけはどうしようもなく、校長より西洋音楽と東洋のそれでは音階が異なるので、君には無理だから、音楽の単位は免除するといわれ、悔し涙を流したと回想しているが[36]、彼を長とする文部省音楽取調掛がやっと繁子のヴァッサー入学の翌年、文部省内用地（現在の東京大学法文経一号館付近）に設置された。そして半年後の一八八〇（明治一二）年三月、アメリカ人音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソン Luther Whiting Mason がお雇い教師として招かれ、彼の手配でアメリカよりピアノ一〇台および楽譜、音楽図書類が届けられた。一〇月には早速一八名の音楽伝習生を入学させて、音楽教員の養成に着手したのであった。

帰国後の繁子は、西洋音楽修得の基礎はまずピアノという音楽取調掛の方針に基づいて、これまでメーソンが教えていたピアノを彼女が任されることになった。メーソンは翌年二月の再契約期限切れに先立つ一八八三（明治一六）年七月、賜暇帰国中に、文部省より解雇通知を受けた。即ち、「学校唱歌教授之儀ハ段々ノ御尽力ヲ以テ先ニ音楽取調掛教員ニ而大概不都合有之間敷様被存且ツ洋琴等之教授モ永井子ニ而一通リ差支無之様相心得候（後略）」として、もはやメーソンがいなくとも繁子で十分やってゆけるという見通しになったのである。また、一八八四（明治一七）年、伊沢修二掛長の音楽教育の経過報告にも「（前略）当初はメーソン氏之ヲ伝習シタリシガ幸ニ瓜生繁女ノ米国ニ於テ該科ヲ卒業シ帰国シタルニヨリ方今ニ在リテハ専ラ同人之ヲ教授シ其進歩ヲモ大ニ見ルベキモノアルヲ致セリ（後略）[37]」という記述があり[38]、繁子のレッスンで伝習生らは大いに進歩していると述べ、その中には後ウィーンに留学した逸材の幸田延もいたのである。メーソンの送別演奏会ではプログラムに「瓜生繁受持[39]」としてピアノ部門を一手に取りしきっている様子がうかがえる。

また、一八八二（明治一五）年七月一五日、東京女子高等師範学校の卒業式に、「永井嬢が弾くピアノに合わせて会場に入って来た」生徒たちを、その当時帝国大学で教えていたE・S・モースEdward Sylvester Morse は非常な感動を以て記述している[40]。彼女はこうした行進曲の楽譜を一八九九（明治三二）年、銀座の「十字屋」から刊行し、一九〇四（明治三八）年までに四版を重ねている。

さて音楽に合わせて行進する次にはダンスということになるが、前述のヴァッサーの学年末の行事に卒業生を送るダンスの会があったが、一八八七（明治二〇）年一〇月、東京女子高等師範

Hosei University Repository

学校の教職員および帝国大学の教授らが発起人となり、会話・舞踏・音楽を以て善良な男女交際を目的とした「和楽会」が設立された。[41] 繁子も、桜井錠二、矢田部良吉、穂積陳重、鳩山春子、箕作佳吉、豊田芙雄子、武村千佐子、鮫島晋らとともに委員として名を連ねているが、以後女子師範では卒業の時に盛大にカドリールやコチロンを踊る習慣は、まさに繁子がヴァッサー時代の体験を同校で試みたものと思えてならない。

しかも、世は鹿鳴館時代という欧化熱の最高潮の時でもあったから、舞踏会でのダンス音楽の演奏を依頼されたこともあったらしく、ある時、生徒の幸田延に、自分に代わって弾いてくるようにといわれた、という幸田の回想は興味深く、[42] 繁子自身好むと好まざるとにかかわらず、欧化政策に大いに貢献したことになろう。

もっとも舞踏会や西洋音楽の演奏会は、まだ日本に於いては一般の国民とは隔絶されたところで盛んであり、音楽そのものよりも社交の一要素として上流階級・知識人の間に浸透していったのが現状であった。繁子自身の演奏は、一八八九（明治二二）年六月二四日の「音楽同好会」の発会式とその一ヶ月後の七月六日の東京音楽学校の第一回卒業式において、曲目は同じウェーバー作曲の華やかなワルツ「舞踏への勧誘」を演奏したことが記録に残っている。[43] 彼女の弾くピアノに聴衆は大いに刺激を受け、話題となったであろうし、それによって西洋音楽を世間にアピールする役目を果たしたことは疑いを容れない。ちなみに一八九二（明治二五）年四月、読売新聞社は婦人和洋音楽家の人気投票を行った結果、繁子は幸田延に次いで二位となっている。[44]

繁子は一八九一（明治二四）年一〇月二〇日の文部省発令による祝日祭日にふさわしい唱歌の歌詞および楽譜の審査委員会のメンバーとなり、この時に「君が代」はじめ、「紀元節」他一四曲が選曲された。東京音楽学校長村岡範為馳を審査委員長とし、当時の外人教師ディトリッヒも顧問として連なる一六名の中の唯一の女性委員であった。[45] この時彼女は三〇歳の若さであったが、既に四児の母親でもあり、超多忙の毎日であったであろう。繁子がアメリカから持ち帰ったものは、キリスト教の信仰に支えられ、音楽を通じて培われた、明治の日本女性には未だ考えられぬ自立の精神であった、と思う。

一方アメリカ人のメーソンを解雇してドイツ人のエッケルト（Franz von Eckert）を迎えた以後の東京音楽学校は、音楽教員養成からドイツ人音楽家を招いての芸術家養成に教育方針を転換させてゆき、ドイツ一辺倒の時代に入ってゆくのである。それゆえ繁子がアメリカで学んで来た「最高の教養としての音楽」とは相容れなくなってきたが、帰国後の繁子はハリストス正教会のチハイにピアノのレッスンを受けていたとの証言もあり、[46] 教師・家事・育児の傍ら、なお研鑽を積もうとした姿勢を感じとることが出来る。しかし、家庭と両立させることの大変さを繁子はいやというほど味わったであろう。[47]

明治の音楽教育は、繁子の教え子たちによって全国に拡められていったのである。繁子は東京音楽学校を一八九二（明治二五）年に、東京女子高等師範学校を一九〇二（明治三五）年に辞職した。

Hosei University Repository

註

(1) 『津田塾大学紀要』二四（一九九二年三月）一―一六ページ。

(2) "The Days of My Youth――Memories of Famous People and Stirring Times of Ealy Meiji――" *The Japan Advertiser*, 11 September 1927.

(3) 日本英学史学会抜刷一九八四年二月。

(4) 本稿のほかに「永井繁子のヴァッサー・カレッジ留学――初の国費女子留学生」（『安岡昭男先生古稀記念　近代日本の形成と展開』（巌南堂から刊行予定）所収）があるので、そちらのほうも参照していただきたい。

(5) *Vassar College Annual Catalogue* 1878-79, p. 53

(6) Preliminary Examination Cards, 1877-78, Nagai Shige ヴァッサー・カレッジ図書館特別資料室所蔵マイクロフィルムによる。

(7) *Vassar College Annual Catalogue* 1878-79, p. 42.

(8) 音楽科の修業年限については註四にあげた小論を参照のこと。

(9) "Vassar Cashier's Book, 1884" ヴァッサー・カレッジ図書館特別資料室主任のナンシー・マックケックニー Nancy Macheckne さんの好意によってそのコピーを入手することができた。

(10) *Vassar College Annual Catalogue* 1878-79, p. 33.

(11) *The Vassar Miscellany*, X-10(July 1881), p. 509.

(12) *The Vassar Miscellany*, I X-6(March 1880), p. 315.

(13) 吉川利一『津田梅子』中公新書（一九九〇）五八ページ。

(14) 「かつての女子留学生懐旧談にふける」『東京朝日新聞』大正五（一九一六）年一〇月二二日。

(15) ニューヨーク州立大学パルツ校前教授メリー・ジェーン・コリー Mary Jane Corry 氏の直話による。

(16) *Dictionary of American Biography*, Ritter, Frederick Luis, q. v. G. S.Dic kinson : "Outline of the History of the Department of Music, Vassar College 1863-1953."1957(Typescript. In custody of the Vassar College Music Library), p. 20.

(17) ヴァッサー・カレッジ音楽科の教師、学生によって演奏されたリッターの作品は次の通りである。

1 一八七六年六月二六日「音楽の夕べ」プログラム一〇番
「睡蓮」The Water-lily
この時妻のフランセス・レイモンド・リッターの作品「我が子よ。何ゆえにおまえは泣くのか」Why Dost Thou Weep, My Child も演奏された。

2 一八七八年二月二七日「室内楽の夕べ」
「アンダンテ・レリジオーゾ」Andante Religioso チェロとオルガンの二重奏曲

3 一八七九年一二月一七日「第一回音楽の夕べ」
インディアン・セレナーデ「我は汝の夢より覚めたり」I Rise from Dreams of Thee

4 一八八〇年六月二一日「第七回音楽の夕べ」
「協奏曲ロ短調」第二、三楽章

5 一八八〇年三月二五日「第三回音楽の夕べ」
「賛美歌第九五番」

6 一八八三年四月一八日「ニューヨーク・フィルハーモニック・クラブによる音楽の夕べ」
「七重奏曲セレナーデ　ヘ長調」

Hosei University Repository

7 一八八四年三月二六日「ニューヨーク・トリオ・クラブによる音楽の夕べ」
「ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重奏曲」
ヴァッサー以外で演奏された作品は次のとおりである。
一八八一年三月二六日ボストン音楽堂におけるハーヴァード音楽協会主催「第七回シンフォニー・コンサート」
交響曲第二番初演。指揮はカール・ツェラーン

(18) 作品二七は一番、二番とあり、両方とも「幻想曲風ソナタ」という副題がついている。このプログラムではその番号が抜けているが、これは一番のほうである。ちなみに二番のほうが「月光」である。

(19) 奥田恵二『アメリカの音楽――植民地時代から現代まで――』(音楽之友社、一九七〇)一五九ページ。

(20) 同右一五九ページ。

(21) *The Vassar Miscellany*, IX-6(March 1880), p. 301.

(22) 以下の講評は *The Vassar Miscellany*, Ⅷ-9 (July 1879), pp. 486-87に掲載されている。

(23) "Miss Nagai rendered an Impromptu of Schubert's with great delicacy and expression. She shows musical appreciation in her playing. We hope to hear her again soon."

(24) "In the duet, 'The Maybells and the Flowers', the voices of Misses Nagai and Van Benschoten did not seem to harmonize."

(25) 以下の講評は *The Vassar Miscellany*, IX-8 (May 1880), pp. 433-35による。

(26) "Miss Nagai played No 21 of Mendelsson's 'Lieder Ohne Worte' with strength and great spirit."

(27) *The Vassar Miscellany*, IX-9 (June 1880), p. 499によれば五月一九日となっているが、ここではプログラムの日付に従う。

(28) "Miss Nagai gave Taubert's Gradle Song in a manner very acceptable to the audience, judging from the applause excited."

(29) 註(14)に同じ。

(30) *The Vassar Miscellany*, X-7(April 1881), p. 351.

(31) *The Vassar Miscellany*, X-9(July 1881), p. 513.

(32) 音楽科卒業生の学位については註四にあげた小論を参照のこと。

(33) *Annual Catalogue of the Officers and Students* 1881-82, p. 40.

(34) 西原稔『ピアノの誕生』(講談社選書メチエ、一九九五)一四五―一五二ページ。音楽之友社『作品小辞典』一九七二、ロマン派(上)。渡辺裕「音楽の自動化と女性解放」(『大航海』一〇(一九九八))一七三―一七四ページ。

(35) ヒラー(一八一一―八五)はドイツ人で、フンメルの高弟にあたる名ピアニストである。ヘンゼルト(一八一四―八九)もドイツ人名ピアニストで、ベルガー、フンメルに師事し、ロシアの宮廷ピアニストとして活躍した。

(36) 上沼八郎『伊沢修二』(吉川弘文館)七一ページ。

(37) 「メーソン宛 明治十六年以降の契約についてその成否を問う書簡」『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』(音楽之友社、一九八七)第一巻三三七ページ。

(38) 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻六四ページ。

(39) 同右、二一三ページ。明治十五年十二月、後の瓜生外吉海軍大将

Hosei University Repository

と結婚、瓜生姓となっていた。

(40) E・S・モース著、石川欣一訳『日本その日その日三』(平凡社東洋文庫) 六五ページ。

(41) 田甫桂三『近代日本音楽教育史Ⅰ』(学文社) 六四ページ、石井研堂編『明治事物起源』下一二三五ページ。『お茶ノ水大学百年史』(一九八四、五) 七四ページ。

(42) 日本洋楽資料収集連絡協議会編『紀尾井町時代の幸田延——都留正子氏回想——』(一九七七) 四七、五七ページ。

(43) 『東京芸術大学百年史　演奏会篇』第一巻七、八ページ。

(44) 『音楽雑誌』一五号 (明治二五年四月二〇日) 復刻版一七ページ。

(45) 『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻四九八ページ。

(46) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』大空社、一九九六)、九八ページ。

(47) Yoshiko Furuki, et al, eds.: The Attic Letters. Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother (New York, etc., Weatherhill, 1991), p. 48ほか。

その他の音楽関係参考文献

セオドア・テルストロム著川島正二訳『アメリカ音楽教育史』音楽鑑賞教育振興会、一九八四

供田武嘉津『西欧音楽教育史』音楽之友社、一九九一

井上和男編著『クラシック音楽作品辞典』三省堂、一九九三

中河原理編『声楽曲鑑賞辞典』東京堂出版、一九九三

千歳八郎『一九世紀のピアニストたち』音楽之友社、一九八五

千歳八郎『続一九世紀のピアニストたち』音楽之友社、一九八七